

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社



著者の言葉

いわゆる病腎移植問題とは何だったのか。

私はこの問題の発端となった平成十八年十月の臓器売買事件からずっと、「移植への理解を求める会」の会員として、この問題にかかわってきました。

いまふりかえると、病腎移植が明るみになってから半年余り、マスメディアは日本移植学会幹部の偏狭な発言をひきあいにした万波医師へのバッシング報道で、世間に狂騒をもたらしておりました。

狂騒が去ったあと、誤解されやすい病腎という表現は、修復腎と改められますが、修復腎移植の再開を求める透析患者や移植者のみなさんの長く苦しい運動だけが、世間からふりむかれることもなく残されたままになっています。

この間、私は透析患者、移植者、医師、メディア関係の皆様への取材を重ねながら、いのちの尊厳という重いテーマと向き合ってきました。そして限りあるいのちのなかで生きる人間の視座から、今日の医療への問いかけとして、病腎移植が提起したことを書き残そうと思うようになったのです。

小説として書きましたが、現実には修復腎移植再開を目的としている裁判は続いています。開廷の朝でペンをおいたのは、もちろん裁判へ大いなる希望を託してのことでもあります。

追記

松山地裁は、平成二十六年十月二十八日に、原告の訴えを棄却したが、「慢性腎不全に対する治療方法の発展を願う患者ら及び医療従事者の真摯な思いを鑑みれば、国内での研究、議論の進展並びに患者及び医療従事者の対話と相互理解によって、慢性腎不全に対する優れた治療方法の実施に向けたさまざまな取

組みがなされることが望まれる」と原告患者側に配慮のある言及をした。

裁判は高裁へと引き継がれ、平成二十八年一月二十八日、高松高等裁判所は一審の判決を支持し、控訴は棄却された。

作品説明

この小説は、事実に基づいて書いておりますが、作中の密談が架空の創作となっておりますので、小説の形式にしております。従って登場人物も仮名です。

内容は、二〇〇六年十月に宇和島で起こった臓器売買事件、翌月に宇和島徳洲会病院と市立宇和島病院で明らかになった、万波誠医師（作中では丸山）を中心とする瀬戸内グループの医師たちによる病腎移植問題の本質とその舞台裏にせまった作品です。

「移植医療への理解を求める会」が、三種類の腎移植を受けた（生体腎、死体腎、病腎）移植者・野村正良（地方新聞社記者・作中では水野）によって立ち上げられ、万波誠医師を処分しようとする移植学会と対決し、病腎移植を正当な医療として認めさせようと、啓発・陳情活動を展開します。臓器売買事件を理由に万波誠医師を医学界から追放しようとする企て、さらには病腎移植をとんでもない医療として糾弾しようとする守旧派勢力の名声、権力、利権が絡み合った構図が明らかにされてゆきます。

厚労省は当初、病腎移植を禁止し、二つの病院と万波誠医師の処分（保険診療停止、保険医資格はく奪）を強行しようとしてきました。しかし欧米で病腎移植の評価が高まったことや、患者団体並びに徳洲会（作中では恵州会）の抵抗などで、万波誠医師への聴聞は前代未聞の不成立となり、さらに延期、そして事実上中止され、処分は行われずに現在にいたっております。このような異常な事態をうみだした利害関係者の構図の解明へと、作品はせまっています。

また、ピック病の妻の介護にもおわれる主人公や、体調を悪化させてゆく腎臓病患者の苦悩を描き、「いのち、老い、介護」の問題も問いかけています。

各節の小見出しと内容はつぎの通りです。

- 星座（主人公夫婦のこと。妻はピック病の前兆があらわれている。移植医の丸山、丸山の支援者の内藤医師、水野の職場の上司の津和田など登場）
 - 予兆（臓器売買事件が発覚するまでの学会、メディア、警察のうごき）
 - 売買（実際にあった臓器売買事件の真相）
 - 病腎（病腎移植を自主的に公表するまでの当事者たちの葛藤）
 - 指弾（マスコミのすさまじい病腎移植バッシング、混乱の状況を描く）
 - 支援（丸山医師を支援するため立ち上がった患者団体のうごき）
 - 対立（病腎移植をめぐる対立する学会と患者団体・徳洲会）
 - 決起（患者団体の決起集会にいたる苦闘を追う）
 - 弾圧（学会の一部幹部たちの病腎移植つぶしのうごき）
 - 禁止（厚労省による病腎移植の禁止決定とその波紋）
 - 処分（途中で中止された聴聞の混乱紛糾した様子を忠実に再現）
 - 春雷（学会幹部を提訴するに至るまでのことと、移植医療の明日への展望）
- エピローグ

主な登場人物は次の通りです。

- 水野正良（定年まじかの新聞記者、腎移植を3回うけた病腎移植者、丸山医師がはじめた病腎移植を認めるように運動をおこす）
- 久美子（水野の妻。若年性痴ほう症・ピック病を病み、衰弱してゆく）
- 丸山誠（腎移植で高名な医師。病腎移植をしていたことを公表）
- 内藤俊文（丸山医師の育ての親。市立宇和島病院名誉院長）
- 津和田俊一（愛媛新報専務。水野と同期。病腎問題報道を指揮する）
- 有吉裕美（2回、移植を受けている。音楽教師。移植腎臓が悪化し透析へ）
- 向井原陽二（病腎移植者、漁船団をもつ宇和海の漁師）
- 野添紘治郎（恵州会本部事務総長）
- 吉田学と京子夫妻（臓器売買事件の当該者）

小説・病腎移植

青山 淳平

星座

まさよし

水野 正良は宇和島へでかけるまえの晩になると、よく夢をみる。それも遠いむかしのことばかりで、なつかしきや哀しみに胸をつかれて目覚めたときなど、眼じりからこぼれた涙が枕をうすくぬらしていたりする。

この日もあけ方、小学校へ入学するまえのことを夢にみた。五歳の年の夏、水野は扁桃腺炎による高熱がもとで急性の腎炎にかかっていた。それで母は息子をつれ、学校生活のことで相談にでかけた。ひっそりとした職員室で水野は木のいすに腰をかけ、床までとどかない脚をぶらぶらさせていた。

母と教師との間でしばらくやりとりがあり、「給食だけは、ちいと気をくばってくださいはいや」と母は頭をさげた。

「塩分がいかななら、スープはやめとったほうがええなあ」
教師はさぐるような目を水野にむけ、

「かまん（大丈夫）、先生のいうとおりにならばええけん」
と、ごつい手で水野のやわらかな頭をなでた。

帰りは母と遠浅の浜辺をあるいた。白い砂浜がひろがり、そのはてで、早春の海がきらきらと光っていた。小学生になれることはうれしかった。ただそのぶん、母の心配がふえる予感がした。少しいじけた思いが不用意に頭をなでられた感触とまざりあい、あるくほど気分はいつそう鬱屈うっくつした。母の手をふりほどき、立ちどまると顔をあげた。

「ねえ、母さん。ぼく、生まれてきてよかつたん？」

幼く、まだ主客未分化のころのことである。本当はこのとき、ぼくのこと嫌い？と母の気持ちをつかめたのだが、夢の中では、今日までずっと自意識の芯しんに巣くう不条理な苦しみを若い母にぶつけていたのである。

母はしゃがみこみ、息子を胸にだきとめようとした。その表情はみるみるゆがみ、左右にゆれ、幾重にもかさなるとかき消えた。

かわってあらわれたのは妻の久美子である。

「あたしの腎臓、かえしてよお！」

妻はのどもとをふるわせる。

「いまさら、そんなこと？」

水野は頬をこわばらせる。

「腎臓がかわいそうでたまらないの」

「でも、ぼくはありがたかった」

「一週間で棄てられたのよ。ひどい。かわいそうよ」

妻はふいとむこうをむいた。

「一週間でも久美子、ぼくはいのちをつないだ。感謝している」

おいすがるように、水野は妻にいった。

おだやかに話したはずだが、目がさめると息があらくなっていた。

じっと天井をみつめ、それからかたわらの布団で眠っている妻の顔をうかがった。髪が乱れ肩にまでかかっている。手をのばし、やせた襟首のほつれ髪をそつとなでながら、水野は妻の息づかいに耳をかたむけていた。

二〇〇六年一月の第三水曜日の朝は、このようにしてあけた。

この日、午前十時すぎに車で松山をでた水野は、昼前に宇和島の樺崎かばさきという港町へついた。樺崎は幕末の昔、入海いりうみへつきでていた小さな岬の地名で、丘には最新の洋式砲台があったが、いまでは岬のまわりの海はうめたてられ、町になっている。開明のさきがけでもあった洋式砲台は同じところに復元され、大砲が町の上の空をにらんでいた。

この砲台の前をすこしはしると、水産会社の大きな倉庫がたちならぶ広いとおりにへでる。ふだん人影はなく、早朝のひとときだけ、魚介類を運ぶ大型の保冷車が路面をきしませながら、大阪や東京をめざしてはしり去ってゆく。

水野はかよいなれたとおりをすぎ、町外れの倉庫の角を右へまがる。すると視界がひらけ、あたりは南国のリゾート地のように明るくなった。目の前にあらわれたのは、入江の海に面した広い駐車場とベッド数三百床を擁ようする宇和島惠州会病院けいしゅうかいである。

この総合病院がオープンしたのは、二年ほど前の四月だった。開院を前にして、四国西南部の拠点医療機関である市立宇和島病院から、水野の主治医の丸山誠医師と泌尿器科の医療スタッフがごっそり惠州会病院へうつってきた。それで丸山についていた患者のほとんどが惠州会へ転院することになった。水野もそうした患者のひとりである。

午前の最後の順番がやってきて、水野は市立病院のころから世話になっている看護師によびだされた。移植いしよくが外来診察室の丸いすに水野は腰をおろし、丸山医師の涸かれてつやが

なくなった横顔をみつめる。お互い、もう二十年をこえるつき合いである。丸山は背をま
るくし、採血と採尿の検査結果一覧表の数値をたしかめ、やせた肩でフツとひとつ息をは
いた。

ボールペンで数値をチェックしながら、満足そうにいう。

「ふむ、どこも悪いところはありやせん」

水野も二度三度うなずき、

「はい、毎日爽快です」

と主治医の診断に太鼓判でもおすように胸をはった。

腎機能の状態をしめすクレアチニン値は正常そのもので、尿酸値や血圧など重要な数値
もここ何年間、良好なまま推移している。三種類の免疫抑制剤など、朝夕に服用している
薬をつづけるように念をおすと、丸山は水野のほうへ向きなおし、

「もう、何年目になるかなあ？」

と、移植した三個目の腎臓のことを訊きいた。

それはいまの日本の医学界の常識では、いわくつきの腎臓である。水野の場合、その腎
臓を移植したあと数カ月、タンパク尿がつづいていたが、半年後には改善し、魔法をかけ
たかのように完治した。いまは元気なことが奇跡のように感じる日々である。

「この夏の八月で、もう満六年になりますよ」

「ほうか、六年か。まったく問題はないけん、このままずっと使えらい」

「はい、ありがとうございます」

水野はふかぶかと頭をさげた。

地元松山の新聞社に入社し、支局勤務のときに慢性化してしまった腎炎を悪化させたの
は二十一年前、三十七歳のときである。腎不全治療で全国的によく知られるようになった
市立宇和島病院で内藤俊文院長の診察をうけ、即日入院した。このとき腎生検を担当した
のが丸山である。初対面の患者に丸山はぶつきらぼうに宣告した。

「腎臓はほとんど壊れとるけん、透析は時間の問題じゃわい」

それから三年近く、水野は苦しい腹膜透析にたえながら移植を待っていた。まだ日本臓
器移植ネットワークの前身の腎臓移植普及会の時代のこと、臓器は各地域でつくられた
医師仲間のネットワークをとおしてやりとりされていた。水野の場合は、かれの身体に適
合する若い死体腎（死亡した人の身体から取りだした腎臓）が下関共済病院から直接ヘリコプ
ターで宇和島まで空輸され、丸山の手で水野の下腹部に植えつけられた。

十二年後の二〇〇〇年八月初旬、その死体腎がダメになり、水野は妻の久美子の腎臓をひとつもらい、生体腎移植をした。ところが妻の腎臓はA B O血液型不適應で生着せいしやく（移植した腎臓が機能するようになること）せず、一週間後に取りだすというつらい体験をした。すると、腹部の傷がまだいえない八月下旬、丸山から思いがけない提案があった。

「ネフローゼ症候群の腎臓がでるけえ、つかわんかな」

「ネフローゼですか？」

「うん、病腎びょうじん（疾患のある腎臓）じゃが、捨てるのはもったいないけん」

「大丈夫ですか」

「やってみんと、わからん」

丸山は顔色ひとつ変えずに応えた。

ネフローゼ症候群は腎臓のなかの糸球体の障害で血液中のタンパクの減少にともない、手足がむくみまぶたは腫れ、ひどくなると尿毒症の症状がでて死にいたる怖い病気である。ネフローゼはじめてだが、丸山は仲間の医師らの協力をあおぎ、廃棄していた小径腎がん（径四十ミリ以下の腎がん）などの病腎の提供をうけ、市立宇和島病院ですでに二十五例の病腎の疾患を修復し、移植していた。いずれのケースも患者の予後よごは順調である。

すてる腎臓、とりわけがんの腎臓を移植するなどということは、医学会の常識では考えられないことで、発覚すれば大問題になることは必至である。丸山はいわば緊急避難的に、こっそりやっていた。学会で発表するなんてことは、まったく頭がない。

「ネフローゼも、つかえるかもしれん」

「しかし先生、……」

「ダメなら、透析にもどればええ」

丸山は真剣だが、あつけらかなとしていた。

腎臓をひとつムダに失ったばかりの久美子は不信感をいだき、異常なほど神経をたかぶらせ、つよく反対した。妻の無念と心配は理解できるのだが、すでに死体腎と生体腎の移植を受けている水野に、病腎以外の腎臓の移植をうけるチャンスを待つとすれば、早くても十五年以上はかかる。もしその間、血液の人工透析でいのちをつなぐことができて、透析をしながらの仕事は心身ともに過酷である。水野は久美子をおしきり、病腎を受け入れることにした。

丸山は患者に対し、うそもハッターもない医師で、

「病理学的にはまだようわからん。がんも四センチ以下なら、切り取って移植すると、

再発もせんし、転移もない。つかえるものをすてることはない。つかえる病腎はつこうたらええ」

とまるで車の部品をとりかえるようにいう。

水野の場合もいのちはよみがえり、いたって健康である。

仕事のほうは、定年もまぢかになって生活文化部の部長にやっとなった。出世からはとっくに見放されているが、いのちがあるだけでありがたく、月に一度、こうして丸山の診察を受け、それから市立病院の院長だった内藤に会って帰ることが、水野には何よりの楽しみになっている。

診察はすぐに終わった。

行こうとすると、ふだんは余計なことをいわない丸山がくびを左にかしげ、何か言いたそうである。水野は座りなおした。丸山は妙なことを口にした。

昨日、家にもどると、隣の寺の だいこく 大黒さんが駆けよってきた。昼間、見知らぬ二人組みの男たちが寺務所へあらわれ、丸山医師のことをあれやこれや尋ねた、というのである。

「すぐ追い返したが、ふたりそろって目つきが悪かったそうや」

「目つきが悪い？」

「いやな目じやったと。なんじやろなあ。わたしは貯金もないが借金もない」

「親しい患者の保証人になっているとか？」

以前、丸山は患者の手術代をたてかえたことがある。

「ないない。車かて中古じゃが、ちゃんと現金で買つとる」

「だったら、それ、ひよっとして興信所かもしれませぬ。東京のお嬢さんに結婚話があつて、それで調査員が……」

「いやあ、そんなことはありません」

丸山は手をふって否定し、

「娘と女房はだいぶ前からフランスにおる」

とすこし寂しそうな顔になった。

八年前、一人娘が東京の大学に進学したのを機に、妻も東京で娘と同居し、宇和島に帰らなくなった。別居がはじまったのだが、家事は通いの老女がやっていたので、丸山に不自由な様子はなかった。その母娘がフランスにいる、というのならどうやら身元調査の類ではなさそうである。

水野が宙をにらんでいると、

「あなたが記者さんだから、つい話したが、えらいつまらんことをしゃべってしもうたなあ。大事な用事なら病院へ訪ねてくるじやろ。すまん、いらん心配かけました」と、丸山はてっぺんまで禿げあがった頭を軽くさげた。